FM シアター

『聞こえの彼方』

脚本　小松與志子

00分00秒　時報

00分05秒　（女性アナ）FMシアター

悠介（18）N（＝ナレーション、語り　以下Nと表記）
その朝、目を覚ました時、何だか妙な静けさを感じた。

（キーンという気配音＝音楽）

00分20秒

悠介N　僕は朝起きるとまず、テレビのスイッチを入れるのが習慣になっている。ちょうど、天気予報の時間で、そのお天気お姉さんが可愛くて、毎朝、見るのを楽しみにしていたからだ。ところが、どういう訳か、今日は、お天気お姉さんの声が聞こえない。

00分43秒　（音楽（エレピ＝電子ピアノ）が始まる。）

悠介M（＝モノローグ、心の声　以下Mと表記）
あれ？　どうしてロパクなんだ？　ボリュームを最大に……
（リモコンをいじる音）やっぱ、聞こえない。ちょっと待てよ。そう言えば、リモコンを押す音も。

01分00秒　（ドシンドシン、しかしこもった音）

01分04秒　悠介N　窓ガラスの震える気配に、振り向くと、学生アパートの隣の部屋に住んでいる男が、僕の部屋のベランダに入り込んで、パジャマ姿で何か怒鳴っている。なぜか、そいつもロパクだ。
窓を開くと、そいつは、僕が握っていたリモコンをひったくってテレビのスイッチを切り、リモコンを部屋に投げ込んで怒鳴った。

01分33秒　隣の男子学生　（棒読み）近所迷惑を考えろ！　バカヤロー！！

01分37秒　悠介N　その言葉を僕は声を聞いて理解した訳ではなかった。唇を読んで分かったのだ。隣の学生は、大音量で鳴っているテレビを止めに来た。つまり、そいつには聞こえている大音量が、僕には全く聞こえていなかったのだ。

（音楽（エレピ＝電子ピアノ）終わる）

01分58秒　悠　介　（耳鳴りのように響いて聞こえて）すいません……。

02分02秒　　悠介Ｎ　そう言った自分の声も、聞こえなかった。
この朝、僕は完全に聴力を失ったのだった。

02分12秒　（音楽（ビオラ、フルート、ギター等）始まる）
02分20秒　（女性アナ）作、小松與志子　音楽、長生淳（ながおじゅん）
『聞こえの彼方』
出演　上村祐翔（ゆうと）　平栗あつみ　若松力　ほかのみなさん。

02分43秒　（音楽終わる）

悠介Ｎ　僕はやけになり、皿に当たった。

（皿が投げつけられてガシャンと砕ける音）
悠　介　もしかしたら、次の皿が割れる音は聞こえるかもしれない。
（次の皿が投げられて砕ける音が変に唐突に消えて、無音の気配のイメージ音が広がる。）

03分02秒　　悠介Ｎ　しかし、何を壊しても、もう僕の耳に音が戻ってくることはなかった。

03分05秒　（キーンという音楽始まる。途中からエレピ＝電子ピアノ、加わる）

悠介Ｎ……僕は小学 3 年の時、高熱を出した後、進行性の難聴になり、30歳くらいで完全に聞こえなくなるだろうと言われていた。それなのに、18歳で完全失聴の時が来てしまった。

03分27秒　　悠　介　ちくしょう！　大学に入ったばかりだというのに！！

03分35秒　　悠介Ｎ　難聴というハンディのため、大学入試はかなり努力を要した。しかし、僕は大学へ入りたかった。階段教室で講義を受けたり、部活をやったり、合コンしたり、そういう当たり前の青春を経験したかったのだ。

03分55秒　　悠　介　（泣き出しそうに）明日から新入生のガイダンスが始まる。絶対に大学へ行かなきゃ。
（音楽終わる）

04分04秒　（携帯電話のバイブレーション音）

悠介 N　東京の母親からのメールだ。難聴の僕には、電話で話すのは難しく、親との連絡はもっぱらメールなのだ。

04分17秒　（携帯電話を開いてメールを操作する音）

悠　介　（メールを読んで）いよいよ、授業が始まりますね。悠介が一人暮らしを始めて一週間。何もかも新しい経験で、始めは疲れることでしょう。

母の声(はじめは重なって、響いて聞こえてくる)　始めは疲れることでしょう。困ったり、不自由したりしたら無理しないで連絡してくるのよ。

04分36秒　悠　介　全然聞こえなくなったなんて言ってみろ。母さんは、5時間後には車で迎えに来て、家に帰りましょうと言うに違いない。

04分49秒　悠介N　僕は、相手の唇を読む口話の訓練を積み、かなり言葉を解読できるし、話し方も健聴者と変わらなかった。それはすべて母親の努力のお陰なのだが、次第にそれが重荷になって来た。

いつまでも母親に守られ、庇われていては、大人になれないような気がして、わざと遠くの大学を受けて一人暮らしを始めたのだ。

05分17秒　悠　介　それなのに、一週間やそこいらで、やっぱ駄目でしたと帰れないよな。

05分23秒　（ワーンと入った街の喧騒がぼやけて、消える。無音の気配。）

05分34秒　悠介N　次の日、音の無い中を、恐る恐る大学へ出かけて行った。

05分36秒　（キーンという音楽始まる。途中からエレピ。）

悠介N　キャンパスまでは歩いて行ける距離だったが、補聴器を付けていた頃と違って、もう眼だけが頼りだった。

05分50秒

（自転車がベルを鳴らしながら背後から近づいて来て、急ブレーキをかける音が唐突に消えて、無音の気配。）

自転車の若い男　（棒読みに聞こえて）危ねえなあ！　気をつけろよ！

05分55秒　悠介M　そっちが気をつけろよ！　見えてるんだろ！

05分59秒　（人がドスッとぶつかる音が唐突に消えて、無音の気配。）

中年の女　（棒読み）もうっ！　急に立ち止まらないでよ！

06分04秒　　悠介Ｍ　ここはオバちゃんだけの道じゃなんだよ！
06分10秒　（腕をつかまれる音、ふいに消える）
悠介Ｎ　いきなり、中年の男から腕を掴まれた。

中年の男　（棒読み）俺の車に何、傷つけてるんだよ！

06分18秒　悠介Ｎ　肩から下げていたバックが、その男の車のバックミラーをこすったらしい。ミラーには傷なんかついてなかった。
06分27秒　中年の男　（棒読み）謝れよ！！
悠　介　自分、耳が聴こえなくて……。
中年の男　（棒読み）下手な嘘つきやがって！

06分33秒　悠介Ｎ　男は、僕の頭を強く押さえて下げさせた。僕が、必死になって障害者手帳をカバンから出すと、引っ込みがつかなかったのか、男は余計強く頭を押さえた。僕は、土下座させられるような格好になった。

06分53秒　悠介Ｍ　神様。どうか、この男からも、聞こえを奪ってやって下さい。
07分03秒　（音楽終わる）

新入生！こっちだよ。写真部だよ～
悠介Ｎ　大学のキャンパスは、新入生の部活の勧誘でごった返していた。
07分11秒　男子学生１　君！　テニス部入らない？
女子学生　ねえ、写真部なんだけど、興味ない？
男子学生２　落研だよ！　落研！（響いてイメージになっていく）

悠介Ｎ　多分こんな感じの声が、キャンパスを渦巻いているんだろう。

07分25秒　（キーンという音楽始まる。途中からエレピ。）
悠　介　部活はいいから、ガイダンス会場はいったいどこなんだよ。
Ａの101、　Ａの101。あ、ここか。

07分41秒　悠介Ｎ　Ａの101教室というのは、僕が憧れていた階段式の大教室だった。一番前に座って、説明者の唇を読もうとしたが、いつも僕の方を向いて話してくれる訳ではなく、理解はお手上げだった。

07分59秒　悠介Ｍ　単位の申告、第二外国語の選択……。

08分05秒　悠介Ｎ　回りの新入生の口を読むと、こんな言葉を言ってる。
大勢の中にいても、僕はとても孤独だった。
08分19秒　（音楽終わる）

（自販機からペットボトルが落ちる音）
悠　介　（飲んで、ため息）やっぱり、無理だな、何もかも……。

08分34秒　浩　次　（ところどころ途切れて聞こえて）ちぇ。（切）れちまった。
（以下括弧でくくられている部分は飛ばしてセリフ言う）

悠介Ｎ　ベンチの隣に座った三分刈りの学生が、携帯の電池が切れて、嘆いているようだ。
08分42秒　（カバンから取り出す音）
悠　介　これ使う？
悠介Ｎ　僕は充電アダプタを差し出した。携帯メールは必需品だから、
充電アダプタはいつもフルにして持ち歩いているのだ。
08分54秒　浩　次　おお！　（サ）ンキュー。（便）利なの、（持）ってんなあ。

08分56秒　（アダプタを携帯にセットする音。）
浩　次　お前、（ガイ）ダンスの（内）容、理解できた？
悠　介　え？　何？
09分02秒　悠介Ｎ　僕は懸命に、その学生の唇を読んだ。唇を読もうとすると表情が見えず、
表情を見ていると唇が読めないので、必死だった。
09分13秒　浩　次　（あの）説明分かりにくくねえ？
マジ、（俺）達を卒業させる（気）あんのかよ。この大学は。
悠　介　ほ、ほんと、そうだよなあ。
浩　次　俺、本間（浩）次。浩次と（呼）んでくれ。
悠　介　狩谷悠介。
浩　次　じゃあ悠介って呼ぶわ。いいよな？
悠　介　うん！
浩　次　よし、（メル）アド、（交）換しようぜ！
悠　介　あ、うん。
浩　次　なあ、（あ）そこに座ってる娘、可愛くね？
09分33秒　（音楽始まる　フルート、エレピ、ビオラ）
悠介Ｎ　浩次の視線の先には２人の女子学生が話しているのが見えた。
悠　介　どっちが？
浩　次　左！

09分46秒　悠介Ｎ　僕も左の娘が可愛いと思った。横顔が、ちょっとお天気お姉さんに似ている。
２人がこっちを向いて、僕たちのことを話題にし始めたのが、解読できた。

09分59秒　（音楽終わる。）

女子学生１　右の男子、岡田准一に似て、格好良くない？

悠介Ｍ　（読んで）右の男子、岡田准一に似て、格好良くない？

10分05秒　（キーンという音楽始まる）

女子学生１　左の三分刈りは、オジン臭い。

悠介Ｍ　左の三分刈りは、オジン臭い。

女子学生二人　（はじけるように笑う）……。

女子学生１　だけど、岡田は暗そ。何考えているか、読めない。

悠介Ｍ　何考えているか、読めない。

女子学生２　ええ、そうかなあ。

女子学生１　三分刈りは単純だね。詰めも甘そう。

悠介Ｍ　詰めも甘そう。

10分24秒　悠介Ｎ　僕は嫌になって、彼女たちの唇を読むのを止めた。左の娘が人の値踏みをしないことが、救いだった。

10分35秒　（音楽終わる）

浩　次　なあ、あの娘ら、（お）茶でも誘ってみようか？

悠　介　え？

悠介Ｎ　浩次の提案が聞こえたかのように、右が左の娘を促して、こっちにやって来た。

10分47秒　女子学生１　（同）じ学部でしょ？

浩　次　うん！　（よ）ろしくな。

女子学生１　（こ）のあと、一緒、（カ）ラオケでも行く？

悠介Ｍ　カラオケ！？　聞こえないのにどうやって歌うんだよ！

浩　次　うん。（行）く行く。（悠）介も行くだろ？

悠　介　え、あ、いや、その……。

女子学生１　（と）りあえず、（携）帯番号とアドレス、交換しよ。

悠介Ｎ　僕以外の３人が一斉に、携帯を取り出した。
左の娘が、携帯を構えて、僕を見た。

悠　介　あ、あの、アドレスはいいけど、番号は……。

悠介Ｍ　（うろたえて）電話なんてかけて来られても、話せない。

女子学生１　（ど）うして番号は（駄）目なのよ？

悠　介　あ、それは……。

女子学生１　（教）えたくないなら、そう言えばいいじゃない。

浩　次　（非難するように）悠介。

悠介Ｎ　左の娘が、睨むように僕を見た。

女子学生２　何よ、偉そうに！

悠　介　用を思い出したから、帰る。

11分44秒　（雨の音。それが、唐突に消えて、キーンという音楽。）

悠介Ｎ　次の日は雨が降った。雨音は、通行人や乗り物の気配さえも完全に消してしまうから、怖くて外にも出られなかった。本当はもう辛くて大学に行きたくなかった。

12分12秒　悠介Ｍ　真っ暗なマンホールの中って、こんな感じなんだろうな。

12分19秒　悠介Ｎ　部屋の入り口わきの窓ガラスの向こうに、ドアを叩く人のシルエットが見えた。誰とも会いたくなかったが……。

12分28秒　（ドアを開く音。）

宅配業者　（棒読み）お届け物です。

悠　介　ああ。

宅配業者の声で「呼んでるだから出てくださいよ」「困りますよ」「居留守使わないでくださいよ」が切れ切れに聞こえる。

悠介Ｎ　宅配業者が、毒づいている。

悠介Ｍ　幽霊なんだよ、僕は！　居ないと同じなんだよ！

悠　介　ほら！　印鑑！

（乱暴にドアを閉める音。）（音楽終わる）

12分51秒　悠介Ｎ　宅急便は母親からだった。

（ガムテープを外す音。）

悠介Ｎ　レトルト食品や野菜ジュース、新しい夏物のポロシャツなどが入っていた。

13分01秒　（音楽始まる。ビオラ、エレピ）

悠介Ｎ　母親の心遣いが、今は腹立しかった。

（宅急便の箱を投げつけ、中のものが散乱する音。）

悠　介　（心の声で）お前は、弱者だ、弱者だ、弱者だ。
社会のお荷物だ、お荷物だ、お荷物だ。
助けて貰わなければ生きていけない、生きていけない、生きていけない……。

13分24秒　悠　介　くそっ！　一度死んで、生まれ変わったら、今度は耳が聞こえるようになっているかなあ。

悠介Ｎ　もう一度、勇気を出して、大学へ援助の相談に乗って貰いに出かけた。

13分44秒　（音楽終わる）

13分49秒　悠　介　ええっと、……教務課、……学生課、ここがいいのかな。……
あのう……。

事務員　はい、何かな？

悠　介　自分……、耳が聞こえなくて……。僕の方へ口を向けてゆっくり話してくれるか、筆談で、お願いしたいんですけど……。

14分12秒　　悠介Ｎ　事務員は明らかに、厄介なのが来たなという顔をした。

事務員　君、（ハ）ンディのことは、（入）学の届け出に書いた？
悠　介　書きましたけど、その時は、完失じゃなかったので。
事務員　完失？
悠　介　完全に聞こえなくなったんです、入学式の後に。それで……。
事務員　（被せて）（ちょっ）と待ってて。

14分34秒　　悠介Ｎ　事務員は僕の話を聞こうともしないで、課長の前に行って話し始めた。課長の答えている言葉が見えた。

14分44秒　（キーンという音楽）

課　長　嘘って　？　本当は聞こえているってことか？
悠　介　（読んで）本当は聞こえているってことか？
悠介Ｍ　全く、もう、うんざりだよ！

14分55秒　　課　長　（立ち上がって）あ、ちょっと、君！
悠　介　（怒鳴って）僕は言葉を獲得してから難聴になったから、喋ることに不自由はないんだよ！　総合大学の学生課がそんなことも知らないのかよ！　困っている学生を助けるどころか、疑うのかよ！！

15分11秒　　悠介Ｎ　涙が溢れそうになるのを隠すようにして、学生課を走り出た。

15分16秒　（音楽終わる）

15分17秒　　悠介Ｎ　僕は、全く、大学へ行かなくなった。

15分23秒　（音楽始まる。ピアノ、ビオラ）

悠介Ｎ　僕は大学で、地理の勉強をしたかった。中学校の頃、僕に口話を教えてくれた先生が、アフリカが好きで、雄大な景色や動物の写真を一杯見せてくれた。自分もいつかこんな景色の真ん中に立ってみたいと思ったが、難聴が進むにつれて、それが難しい夢だと分かり、せめて地図の上だけでも、アフリカや世界を旅したいと思ったのだ。

15分58秒　　悠　介　地図を見て勉強することさえ無理なのかよ……。

16分03秒　（音楽終わる）

（大学付属病院の待合のざわめき。）

16分11秒　悠介Ｎ　もう僕の行先は病院しかなく、大学の附属病院の耳鼻科に行った。
病院へ行くとしたら、僕が小学校で難聴になってから通った実家の近くの大病院が適当だったが、そこへ行ったら、もう大学には戻って来られないような気がした。

16分32秒　看護師　（マイクで）受付番号24番の方、耳鼻科診察室3番へお入りください。

悠介Ｎ　病院は、どの科も患者で溢れていた。僕は耳鼻科の一番端のベンチに腰かけた。
耳鼻科の隣は産婦人科で、母親の腕の中で赤ちゃんが泣いている。聞こえていた頃、あのけたたましい泣き声は好きじゃなかったが、今は懐かしい気がした。

16分59秒　常葉（31）　あの……。
悠介Ｎ　産婦人科の耳鼻科寄りの一番端、つまり、僕のすぐ横に座っていた女の人が、僕の肩を軽く叩いた。
悠　介　えっ？
常　葉　（ゆっくりと）間違って、いたら、ごめん、なさい。あなた、耳が、ご不自由、なのかな？
悠　介　あ、はい。
17分23秒　悠介Ｎ　その人は、口をはっきりと開いて、ゆっくり話した。
その言葉はとても、読みやすかった。
17分31秒　常　葉　あなたの、持っている、その受付番号24番、何度か、呼ばれてる。
悠　介　あ、そうですか？　どうも！

17分43秒　悠介Ｎ　僕が、耳鼻科の受付に行くと、その人が付いてきた。妊婦さんだった
常　葉　この方、24番です。
看護師　（狩）谷悠介さん？　（呼）んだら、すぐに来て下さいね。
悠　介　すいません。
17分57秒　悠介Ｎ　すると、その妊婦さんが。
常　葉　（耳）鼻科の呼び出しが（マ）イクというのは、（配）慮が足りない。
看護師　えっ……。

18分05秒　悠介Ｎ　その妊婦さんの言葉を読んで驚いた。
常　葉　聞こえに（問）題がある人も来るんですから。
看護師　それは……。
悠　介　ありがとうございます。
常　葉　耳の、ハンディは、外から、見えない、ものね。

18分21秒　悠介Ｎ　その人は、産婦人科の方へ戻って行った。
僕は久しぶりにちょっと気持ちが柔らかくなったような気がした。

18分31秒　（カーテンの開閉音）
医　者　（ゆっくり）ちょっと、難しい話に、なるから、このパンフレットを、見ながら、筆談で、説明するからね。
悠　介　お願いします。

（紙に鉛筆で書く音。）
医　者　投薬してみるけど、それで効果がなかった場合は、人工内耳という治療法しかないね。
悠　介　人工内耳？
医　者　機械が、君の壊れた蝸牛の代わりをするんだ。頭の中に電極を埋め込み、頭の外にコンピューター内蔵のマイクを磁石でつける。音の振動刺激を、そのコンピューターで、電気信号に変えて、脳に伝える。
悠　介　それで本当にまた聞こえるようになるんですか！？
医　者　聞こえるようになる。しかし、全身麻酔で耳の後ろの骨を削って電極を埋め込むという手術をしなければならないこと、それから、手術後、電気刺激の入力パターンを決めるプログラミングの作業をしなくてはいけない。
悠　介　それが、うまく行かないこともあるんですか？
医　者　というより、君が人工内耳の音で、満足出来ないかもしれない。君はまだ未成年だから、ご両親ともよく相談して。気が済むまで質問に来ていいから。

悠介Ｍ　電極埋め込み手術、コンピューター、プログラミング。
それじゃまるで、サイボーグみたいになるってことじゃないか。

20分10秒　（待合のざわめき。）

悠介Ｎ　耳鼻科の診察室から出て来ると、産婦人科の待合には、あの人がまだ待っていた。

悠　介　さっきはどうもありがとうございました。

常　葉　あ……。

20分25秒　悠介Ｎ　その人は、急に立って、僕の腕を引っぱって、近くの柱の陰のベンチへ連れて行った。

常　葉　さっきは、大勢の前で、あなたの、ハンディを、晒して、ごめんなさいね。

悠　介　いえ……。

20分43秒　悠介Ｎ　その人はメモ帳を出すと、長いフレーズの言葉は書いて、短いフレーズはゆっくり話してくれた。

常　葉　私のお祖父ちゃん、だんだん聞こえなくなって……。
あなたの様子が、それと似ていて。

悠介Ｍ　どおりで。この人は、難聴の人との会話に慣れているんだ。

常　葉　お祖父ちゃん、９０歳だった。もう手話も、覚えられない。
人とコミュニケーションを取れない。自分一人だけ、風船の中にいるようだって、嘆いてた。

悠　介　風船は外が見えるからまだいいです。僕はマンホールの中にいるようで。

常　葉　分かるわ。

21分26秒　（音楽始まる。フルート、ビオラ、ピアノ）

常　葉　あなたは、まだ、若いもの。聞こえはどれくらい？

悠　介　最近、全く駄目になって……。

常　葉　お祖父ちゃん、言ってた。
言葉を忘れない、一番いい方法は、言葉を、聞くことだって。

悠　介　そうですか。

常　葉　あの世へ、行って、お祖母ちゃんと、再会しても、声が聞こえないと、心配して。

悠　介　分かります。

常　葉　お祖父ちゃんは、死ぬ時の心配を、してたけど、あなたは、若いんだもの、生きていく心配を、するわよね。

22分08秒　悠介Ｎ　その人は、あなたは若いんだからと二度も言った。
若いんだから、勇気を出してねと言われているような気がした。

（看護士がマイクで５３２番を呼んでいる声。）
常　葉　あ、私だ。やっと、呼ばれた。
常　葉　私、常葉久美子。（メモ一枚をはがす音。）また会えたら。
悠　介　はい。

22分34秒　悠介Ｎ　その人は、常にの常と、木の葉の葉という字を書いたメモを渡して、
ちょっと微笑むと、産婦人科の診察室へ消えて行った。

22分47秒　悠介Ｍ　常葉さんともっと話したかったな。
いや、話を聞いて貰いたかったのかなあ……。

22分57秒　（音楽終わる）

（ポストの蓋を開く音。）
悠介Ｎ　アパートに帰ったら、ポストにメモが入っていた。
学生課の課長が訪ねて来たらしい。
23分07秒　悠　介　（メモを読んで）先日は適切な対応が取れなくて申し訳ありませんでした。
課長の声（途中から響きながら重なって）　申し訳ありませんでした。
サポートの方法について相談したいので、一度連絡を下さい。
悠　介　今更、何だよ！

23分21秒　（パソコンを立ち上げる音。）
悠介Ｎ　ネットで「人工内耳」の文字を入れると、14万件もの情報が出てきた。
悠　介　この世界へ入って行かなければ、聞こえを取り戻せないのか？

23分35秒　（携帯のバイブレーション音。）
悠介Ｎ　また母親からかと思ったメールは、思いがけず浩次からだった。
23分44秒　悠　介　（メールを読んで）今、お前の部屋の前にいる？　え？
23分48秒　（急いで、部屋のドアを開ける音。）
悠介Ｎ　浩次が缶ビール２本を手に、ニカッと笑って立っていた。

浩　次　（学）生課の課長がさ、（お）前を探して教室へ来たんだ。
（こ）れは、（何）か訳ありだと思ってさ。

24分01秒　　悠介Ｎ　浩次はどんどん部屋に上がり込んだ。

24分04秒　（缶ビール２本のプルトップを抜く音）

浩　次　まあ、お前も飲め。（と飲む）

悠　介　僕、ビールはちょっと。

浩　次　そうか？（とまた飲む）。お前が、女の子に携帯番号教えなかったから、（何）かあるなとは思ってたんだけどさ。

悠　介　え？　何？

浩　次　（と）ぼけるな。最初のダチだろ。

悠　介　とぼけている訳じゃないんだ。浩次は早口だからさ、言葉を一気に読むことは出来ないんだよ。

浩　次　言葉を読む？

24分30秒　　悠介Ｎ　浩次が缶ビール２本を空にした頃、僕は今までのことを、話し終えた。

浩　次　（ま）るで魔法を見ているみたいだな。（そ）んなによどみなく喋ってよう。

悠　介　もう少し、ゆっくり短く頼むよ。

浩　次　あ、そうか。（ゆっくり、大きく）お前の、悩みに、比べれば、俺の、二浪なんて、大した、ことじゃ、なかったな。

悠　介　え？　二浪なんですか？

浩　次　急に、敬語になんなよ！

悠　介　あ、悪い。

浩　次　（また早くなって）（耳）が聞こえないなんて言いたくないよな。（二）浪だって、（女）の子には言いたくないもんな。（俺）たちは、（青）春の真っただ中だぜ。（自）意識の塊っりだもんな！

悠　介　え？　意識の何だって？

浩　次　えーい、かったるいなあ。そうだ、ちょっとパソコン貸せ。

25分11秒　（ものすごい速さで、キーボードを叩く音。）

悠　介　（画面を読んで）俺達、若い、自意識の塊り、ええカッコしたい、ハンディ隠したい……。うん、そうなんだ。

浩　次　それで、これから、どうするんだ？

悠　介　学生課の課長が相談に乗ると言ってるけど、たぶん、いい方法なんかないよ。

浩　次　はー、買い物でも行くか？

悠　介　買い物？

25分40秒（キーボートを叩く音。）（音楽始まる。フルート、エレピ）

浩　次　お前、ずっと、閉じこもり、栄養不足

悠　介　（画面を読んで）ええ、肉、玉ねぎ、ピーマン、しいたけ、買って、レッツ焼肉！　（笑う）そういうことか。

25分58秒　悠介Ｎ　僕は久しぶりに笑った。そして、本当に二人で焼き肉をして、浩次が、高校時代いかに何回ものナンパに敗れたかという話を聞いて、もっと笑った。

26分10秒　（音楽終わる）

26分15秒（附属病院の待合のざわめき。）

悠介Ｎ　次の週、僕は人工内耳に関する質問を書きだして、また耳鼻科へ行った。

悠介Ｎ　すると、常葉さんが、例の柱の陰のベンチに座っているのが見えたので。

悠介Ｍ　そうだ。常葉さんに、人工内耳のことを相談してみるか。

悠介Ｎ　ベンチに向かって歩き始めると、夫らしき人と一緒だと分かった。

悠介Ｍ　話しかけるのはまずいか。

悠介 Ｎ　その時だった。常葉さんが夫に向かって、険しい顔で言い返した言葉が、読めた。

26分56秒　常　葉　障害者なんて嫌よ。

（音楽始まる。ビオラ、エレピ）

悠介Ｎ　僕は、体が凍りつくような感じがして立ち止まり、呼吸を整えてから、耳鼻科の待合に向かった。

27分11秒　悠介Ｍ　親切そうな振りして、やっぱりそれが本音かよ！

常　葉　あら、また会ったわね。調子はどう？

悠介Ｎ　くったくなさそうな顔で話しかけながら、またメモ帳を出そうとしている常葉さんに、猛烈にムカついた。

悠　介　無理に、話し相手になってくれなくてもいいですよ！

常　葉　えっ？

悠　介　気を遣ってくれなくていいと言ってるんです！

常　葉　（戸惑ったように）あ……、そう……。私は、また、話したいと思ったんだけど……。それじゃね。

悠介Ｎ　メモ帳をバックに戻しながら、離れて行った。

悠介Ｍ　何が話したいだよ。

悠介Ｎ　僕はまた、大勢の中にいても孤独だと感じながら、長い街ち時間を沈黙の中で過ごした。

28分12秒　（音楽終わる）

28分12秒　悠介Ｎ　５月の終わり、入学以来初めて、実家に帰った。
結局、両親に相談するしかなかった。
悠介の母親　あなた！　悠介が！
悠　介　ただいま。
悠介の父親　おお、ちょっと（大）人っぽくなったな、悠介。
悠介Ｎ　母親にいきなりショックを与えないように、形だけ補聴器をつけておいた。
父　親　夏休みまでは帰って来ないで（頑）張ると言ってただろ。（一）人暮らしが無理で（戻）って来るのかと、母さんが心配してさ。

悠介Ｎ　父親は、僕が補聴器を付けていた頃の調子で話した。僕は、補聴器を外した。
悠　介　実はさ、今の父さんの言葉も、全く聞こえなくなってさ。
父　親　えっ？
悠介Ｎ　父親は自分の辛さを隠すようにして、母親を見た。
僕はなるべく明るい表情でそういうことなんだというように、母親を見た。
29分18秒　母　親　（ゆっくり）気が、付いて、いたわ。
悠　介　えっ？
母　親　悠介が、玄関を、入って来た時の、耳を傾げるような、しぐさでね。
ああ、もう、聞こえて、ないんだなって。
悠　介　母さん……。
父　親　そうか……、さすが、母親だな。
母　親　その状態で、電車乗りついで、帰って、来たんだから、大学を、退めるって、話じゃ、ないのね？
悠　介　うん……。薬も試したんだけど効かなくてさ。医者は、手術して人工内耳を付けるしか打つ手がないって言うんだ。
父　親　手術で、人工内耳……。
悠　介　うん、これから説明するけど、どうしようかと思ってさ。
母　親　悠介は、どうしたいの？

30分21秒　（音楽始まる。ビオラ、エレピ。）

30分27秒　悠介Ｎ　そう聞かれて、自分の気持ちが、人工内耳に挑戦する方に傾いていたことに気付いた。誰か、背中を押してくれる人を、待っていたのかもしれない。

父　親　悠介が、出て行ってから、母さん、ずっと、泣いててさ。
三日目に、泣き止んで、言ったんだ。悠介は、強くなって、出ていったんだから、可哀想だと、思うのは、失礼ねって。

31分11秒　悠介Ｎ　僕は人工内耳の手術を受ける決心をして、耳鼻科へ行った。

31分18秒　（音楽終わる）

（病院の待合のざわめき。）

31分24秒　悠介Ｎ　常葉さんが、産婦人科の受付の前で泣いており、ベテラン風の看護師が、強い調子で話しかけていた。

看護師　泣いてちゃ駄目！　お母さんが気持ちをしっかり持たなくちゃ。

悠介Ｍ　（読んで）お母さんが気持ちをしっかり持たなくちゃ。

悠介Ｎ　常葉さんは、泣き止むどころか、さらに涙を流した。

看護師　さ、検査に行って来て。

31分54秒　悠介Ｎ　僕は、気づかれないように、柱の陰のベンチに座って、順番を待つことにした。ところが、常葉さんが、泣きながら座りに来て、僕に気づくと。

32分07秒　　常　葉　ここは、人目につかなくていいのよ。
悠　介　どう……、したんですか？
常　葉　この前の検査でね。お腹の子の、心臓の形が、普通と違うと、分かって。
悠　介　ええっ……。

32分26秒　　悠介Ｎ　常葉さんは、メモ帳を取り出した。

（音楽始まる。ピアノ、ビオラ）
32分31秒　　常　葉　心臓、だからね、無事に、生まれるか、どうか。
今は医学が、進歩していて、生まれてさえ、くれれば、薬や手術でも、
治せるらしい、夫も悪いように、考えるなって言うの。でも……。
悠介Ｎ　常葉さんはまた涙を溢れさせた。
常　葉　私が、障害者になるなら、いいのよ。でもこれから、生まれてくる子供が
障害者なんて、そんなの嫌なの。そんなの辛すぎる。
悠介Ｎ　メモ帳に書かれた、「私が障害者になる、構わない。赤ちゃんが障害者、
嫌、辛い」の文字の上に、常葉さんの涙がぽたぽた落ちた。
悠介Ｍ　そうだったのか……。
悠介Ｎ　常葉さんは、僕の目をまっすぐ見て、真剣に聞いた。

33分37秒　　常　葉　あなたは、お母さんを、恨んでる？　ハンディのある人生なら、
産んでくれなかった方が、良かったと、思ってる？
悠　介　いや！　そんなことはありません！　絶対にありません！
悠介Ｎ　常葉さんは、涙を拭きながら頷いた。僕はもっと、何か言いたかったが、
何を言っていいか分からなかった。

34分07秒　　（音楽終わる）

34分07秒　（音楽終わる）

34分08秒　悠　介　あ、あの、僕、人工内耳の手術、受けるんです。
頭を切る手術なんですけど、頑張って受けることにしました。
常　葉　そう！　それじゃ、私が、出産する頃、あなたは、
もう音を取り戻してるわね。

悠介Ｎ　常葉さんは祈るように言った。
常　葉　私の、赤ちゃんの声、聞いて、やってね。

34分40秒　悠介Ｎ　その日から、何で僕だけがこんな目に遭うんだとあまり思わなくなった。
音を取り戻す方法があることを感謝しようと思った。そしたら、手術準備のための煩わしい検査や診察にも結構楽しく通えたのだった。

35分02秒　悠介Ｎ　夏休みに入ってすぐ、人工内耳の手術を受けた。
手術の時と、二週間後に初めて音入れをする時に、両親が立ち合った。

35分14秒　父　親　（ロボットのような声で）どうだ？　悠介、聞こえるか？

悠介Ｎ　父親が僕の目を覗き込んで、そう言ったのは唇の形で分かったが、
言葉としては分からなかった。人工内耳を通して聞こえた父親の声は、
声というより、不愉快な音だった。

母　親　悠介、聞こえる？

35分38秒　悠介Ｎ　音入れをして初めて家族の声が聞こえた時は感動した、という話は
一杯聞いていたが、僕の場合は、そうはならなかったようで、心底がっかりした。
僕の担当の言語聴覚士が、ホワイトボードに書いた言葉を見せた。

35分57秒　言語聴覚士　これから、マッピングして、声を受け取れるようにしていきましょうね。

悠介Ｍ　今すぐ、きれいな声や大きい音をくれよ！

36分11秒　（マッピングの様子。）

悠介Ｎ　僕は毎週一回、附属病院の隣の建物の言語聴覚室へ通った。マッピングというのは、人工内耳の電気刺激の入力パターンを調整し、僕が一番快適に感じる音を探していく作業だ。

36分35秒　言語聴覚士　（ロボットのような声）狩谷君は若いし、完全失聴していた期間も短いから、すぐに人工内耳に慣れますよ。

悠介Ｎ　しかし、僕の聞こえ方はなかなか改善しなかったし、人の声はいつまでも、ロボットだった。

悠　介　こういう音なら聞こえない方がいいんですけど！

37分00秒　言語聴覚士　（ロボット声）補聴器は耳で聞いていたけど、人工内耳は、脳で聞くと思ってください。段々に脳が音を補うようになりますから。

悠介Ｍ　結局、元のように聞こえる訳じゃないのか……。

37分24秒　悠介Ｎ　僕はマッピングのたびに、ひどくくたびれ、アパートへ帰って、マイクを外し、音の無い世界に戻った方がホッとしたのだった。

37分37秒　（蝉、大学のキャンパスで野球をしている音が、歪に聞こえる。）

37分41秒　悠介Ｎ　学生課の課長に呼び出されて、夏休みの大学へ行った。二学期からのサポートの話だという。

課　長　（ロボット声）術後の経過はどうですか？

悠介Ｎ　課長の声もロボットだった。こういう聞こえだと、言葉の意味を理解しようという気も、相手と話したいという気も起きない。

38分03秒　課　長　実は、本間君が、狩谷君を、サポートする方法を、提案しに、来てくれましてね。

悠　介　浩次が？

38分14秒　悠介Ｎ　浩次の提案と言うのは、誰か他の学生に、僕と一緒の授業に参加して貰い、講義内容をパソコン画面に打って、それを僕が理解するという方法だった。

悠介Ｍ　そう言えば、浩次がうちに来た時……。

38分29秒　浩次（回想）　えーい、かったるいなあ。そうだ、ちょっとパソコン貸せ。
（キーボードを叩く音）

38分36秒　課　長　その方法は、パソコンテイクといって、すでに実施している大学もありました。

悠介Ｎ　課長は、もし僕がそれを望むなら、学生課でアルバイトの学生を応募する、バイト料の予算を付ける用意もあると言った。

課　長　ただ、この方法は、狩谷君のハンディが大学中の人間に知られることになる。本間君はそれを気にしてましてね。

39分05秒　悠介Ｍ　浩次の奴。ちっとも、詰めが甘くなんかないじゃないか。

39分14秒　悠介Ｎ　学生課を出たら、僕はすぐ、帰省中の浩次にメールして、バイトを頼んだ。１分後に返事が来た。

39分22秒　浩次の声　（メールの文章で）駄目だ。俺は止めとけ。同じ頼むなら、もっと優秀な奴にしろ。俺が心当たりを探してやる。どうせなら、女の子がいいよな。よし、可愛い娘を見つけてやるから、任しとけ。

悠介Ｎ　浩次のメールには続きがあった。

浩次の声　人工内耳の調子、良くないらしいが、好きな子が出来たらきっと聞こえるようになるぞ。その子の声を聞きたいと必死で思うからだ。

39分54秒　悠介Ｎ　僕はふっと、言語聴覚士が言った「人工内耳は脳で聞く」という言葉を思い出した。

40分03秒　（踏み切り、子供の騒ぐ声。）

悠介Ｎ　一週間に一回のマッピングの４回目が終わった日、病院の前で、
常葉さんと会ったので、駅前までバスで一緒に帰った。

40分17秒　常　葉　夏休みだから、子供が多いわね。

悠介Ｎ　常葉さんの声も音質は悪かったが、もう筆談をして貰わなくてよくなった。

悠　介　今日は特に暑いから、気を付けて帰って下さい。

悠介Ｎ　常葉さんの方は、夏の盛りを、遠くから通院しなくてはならなくて、
疲れているのか、あまり顔色が良くなかった。

40分46秒　男の子　お母さん、見て！　あのお兄さんの頭に、機械くっついてる！
母　親　余計なこと言わないの！　さっ、行きましょ。

悠介Ｎ　母親は、男の子を引っぱるようにして去って行った。

41分02秒　常　葉　機械人間になった代償がこれかと思ったでしょ、今？

悠介Ｍ　図星だ。

常　葉　ちょっとお茶でも飲もうか？
悠　介　でも、疲れているんじゃないですか？
常　葉　夫は、今、中国へ行ってるの。出産の頃には日本にいられるように。
だから今日は、帰ってすぐ休めばいいの。

41分30秒　（喫茶店のざわめき。コーヒーカップの触れ合う音などする。）

41分34秒　常　葉　私があなたに、ハンディのある人生なら、産んでくれなかった方が良かったかって聞いた日のこと、覚えてる？
悠　介　もちろん、よく覚えてます。

41分47秒　（音楽始まる。ピアノ、ビオラ、フルート）
常　葉　あの時、あなたが、絶対そんなことはないと言ってくれて、
私とても励まされたのよ。
悠介Ｎ　常葉さんはそっとお腹を撫ぜた。

42分05秒　常　葉　あなたが人工内耳の手術を受ける決心をしたのを見て、私の子供も、あなたのように、困難を乗り越えて生きて行ってくれる子供に育てようと思ったわ。

悠介Ｎ　常葉さんは、微笑んで、僕を見た。

42分27秒　常　葉　この子が大きくなったら、あなたも話を聞かせてやってね。
ハンディになんか負けるなって応援してやってね。

42分40秒　悠介Ｍ　常葉さんに励まされたのは僕の方だ。
常葉さんは、僕がはまっていたマンホールのふたを、最初に開いてくれた。

42分54秒　（音楽終わる）

（喫茶店の外）

42分56秒　悠介Ｎ　冷房の効いた喫茶店から、日盛りの表へ出ると、常葉さんが、
ちょっと気分が悪そうに顔をしかめた。

悠　介　大丈夫ですか？
常　葉　平気、平気。ちょっと体が冷えたみたい。

悠介Ｎ　常葉さんの体がぐらっと傾いた。

悠　介　どうしたんですか！？
常　葉　ううっ！

43分21秒　悠介Ｎ　常葉さんの顔色がみるみる青ざめ、立っていられないのか、僕の腕にすがるようにして、ずるずると膝を折った。

（倒れる音）

悠　介　常葉さん！！

悠介Ｎ　回りの通行人が、異変に気が付いた。僕は、人工内耳を通行人に見せて叫んだ。

43分42秒　悠　介　誰か、救急車を呼んでください！　僕、耳が不自由で電話が掛けられないんです！　妊婦さんを附属病院へ運んでほしいと連絡してくれませんか！

43分54秒　（救急車がサイレンを鳴らして走る音。）

常　葉　う、う…。
悠　介　常葉さん！　常葉さん！　しっかりして下さい！

44分13秒　悠介Ｎ　常葉さんはそのまま入院した。容体はかなり悪いようだったが、
僕に、詳しいことは分からなかった。

悠介Ｍ　調子悪かったのに、きっと無理してたんだな。
僕のせいでこんなことになって、すいません、常葉さん。

44分39秒　悠介Ｎ　僕は、ただ廊下のベンチに座って待っているしかなかった。

44分46秒　（慌ただしい足音。）

悠　介　えっ？　何だ、この音！

44分55秒　悠介Ｎ　人工内耳で、医者の看護師の足音が聞こえるたびに、ドキッとした。

45分07秒　悠　介　えっ
（病室のドアが、勢いよく開く音～ストレッチャーが走る音。）

悠介Ｎ　常葉さんがストレッチャーに乗せられて出てきた。もう、夕方になっていた。

45分21秒　悠介Ｎ　どこへ行くのか、何しに行くのか聞きたいことは山ほどあったが、
看護師たちの険しい顔を見ていると、聞くに聞けず、後をついて行くしかなかった。
すると、常葉さんが運び込まれて、ドアが閉じられた病室には、分娩室という名札が出ていた。

45分45秒　悠介Ｍ　常葉さん、赤ちゃんが生まれるのか！？

45分49秒　（分娩室の機械音。）
悠介Ｎ　僕は分娩室のドアに、頭をへばりつけるようにして、必死に中の様子を聞いた。

悠介Ｎ　僕の人工内耳の耳にも、中の様子が緊迫しているのが分かった。

悠介Ｍ　頑張れ、常葉さん！　頑張れ！

46分12秒　（緊迫した鼓動音がたかまり、無音になる。）

悠介Ｍ　どうしたんだ！？　赤ちゃんが泣かないのか！？　それとも、僕の耳が聞こえないのか！？

悠　介　（叫んで）赤ちゃん、泣け！！　僕の耳、聞こえろ！！

（無音の彼方で、フギャというかすかな声が聞こえる。）

悠　介　今、何か聞こえた……。

（フギャ、フギャと声が続く。）

悠　介　赤ちゃんの声だ！！

（効果音）フギャの声がだんだんと大きくなり、やがて、オギャー、オギャーという圧倒的な泣き声になる。

悠　介　（涙で）生まれたんだ……。

悠介Ｎ　僕はこの時、常葉さんの赤ちゃんの声に命を感じた。赤ちゃんの声を、脳と、そして心で聞いたような気がした。

（効果音）赤ちゃんの元気なきれいな泣き声。

47分26秒　悠介Ｎ　新学期が始まると、浩次は本当にパソコンテイクのバイトを５人も連れてアパートにやって来た。ただし、全員、男子だった。

浩　次　こいつらみんな現役だからな、（おー！）優秀だぞ。（よろしく）
悠　介　おお、ありがとう！
浩　次　さあ、焼肉するぞ焼肉。
「うえー焼肉」「食うぞ」「肉、肉」など

47分52秒　（焼肉の効果音）
（学生たちが焼肉にはしゃぐ声）

48分02秒

悠介Ｎ　浩次の話し方やテンポはいつの間にか、脳が覚えていて、浩次の声は、昔から知っている友達の声のように聞こえた。

（音楽始まる。エレピ、ビオラ、フルート。）

48分19秒　悠介Ｎ　聞こえの彼方には、何だか、とても大きな世界が広がっているような気がした。

悠介Ｍ　もしかしたら、いつかアフリカに行ける日が来るかもしれないなあ。

（音楽続いて）

48分49秒　（女性アナ）ただいまの出演、悠介、上村ゆうと、

常葉（ときわ）、平栗あつみ、浩次（こうじ）、若松力（ちから）、
悠介の父、鈴木一功（いっこう）、悠介の母、新井純、
医師、建蔵（けんぞう）、言語聴覚士、谷川きよみ、学生課課長、岩崎ひろし、
ほかに、
渡辺じょう、小暮智美（こぐれともみ）、橘あんり、
小山貴司（たかし）、田上唯（たのうえゆい）、小田恵太（おだけいた）
以上のみなさん、

スタッフ

制作統括、小見山よしのり（こみやま）

技術、小林健一（けんいち）、

音響効果、柏倉梓（かしわくら　あずさ）

演出、真銅けんじ

小松よしこ、作

長生淳（ながおじゅん）、音楽

『聞こえの彼方（かなた）』

ＦＭシアターを終わります。

（音楽終わり）